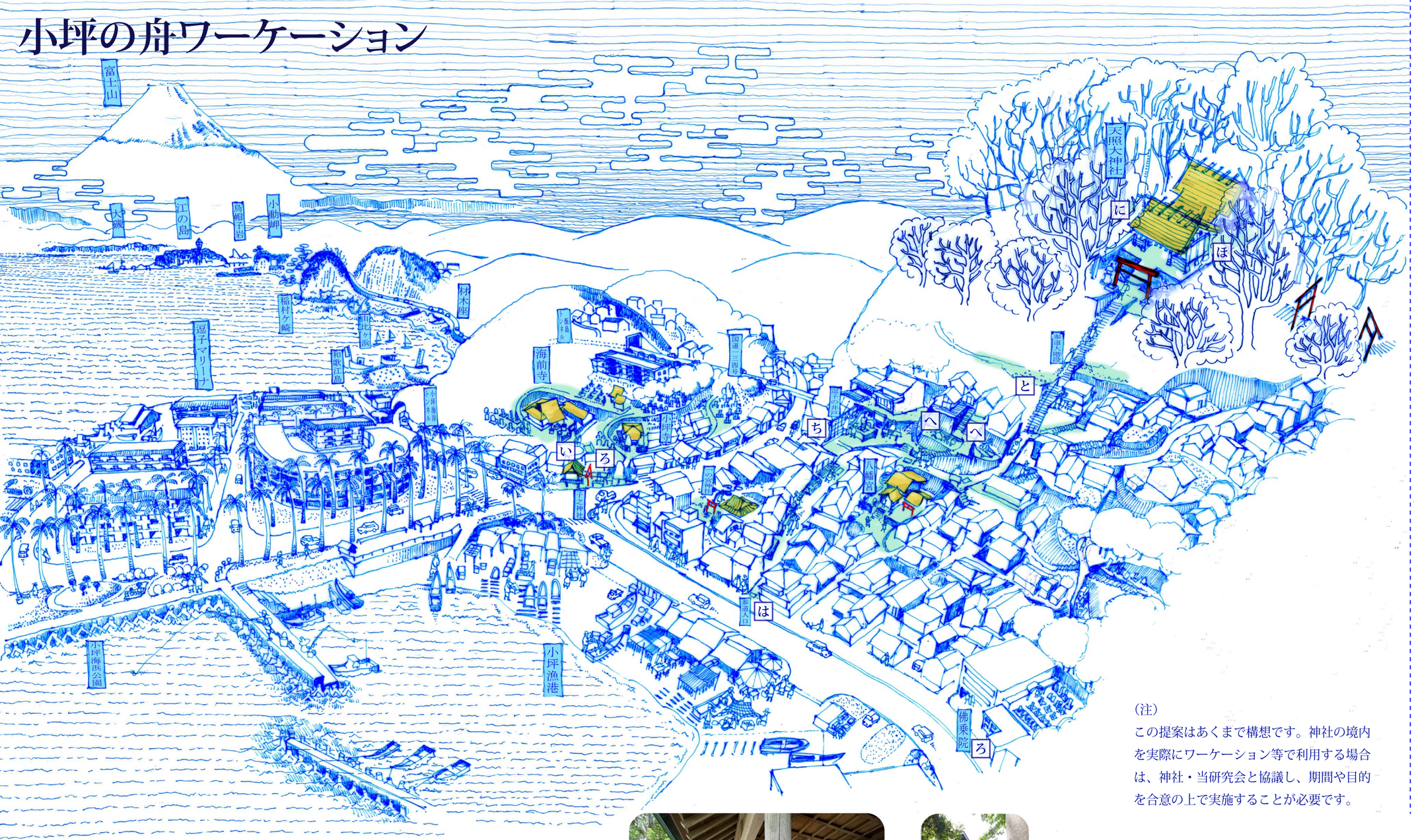
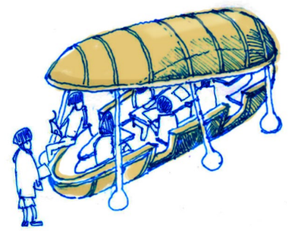
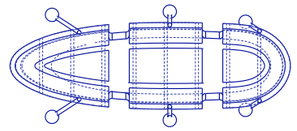
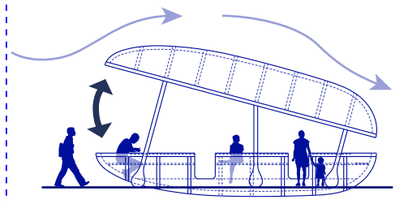
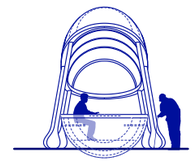
小坪の舟ワーケーション











（注）
この提案はあくまで構想です。神社の境内を実際にワーケーション等で利用する場合は、神社・当研究会と協議し、期間や目的を合意の上で実施することが必要です。

舟
陸に漂う舟は風を効率よく流す紡錘形（開閉式）。
骨組みを木、仕上をチタンとして耐久性・軽量化に配慮。
テーブルやベンチも備える。

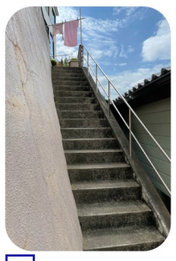
い パブリックベンチがある参道

ろ かつて寺子屋があった場所

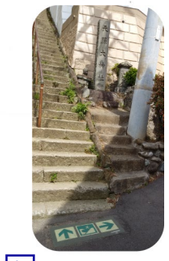
は 参道入口に避難標識

に 拝殿は広くオープンな半屋外空間

ほ ギャラリーとしても使われる壁



へ パブリックなテラスを提供する段状の参道


と 避難とワークアウト階段

ち 参道の途中には人々に親しまれる井戸

心地よく揺れる舟に乗り、木々の隙間からは眼下に漁港、遠くには富士山が望める。ここはリゾートマンションが建ち並ぶエリアと昔ながらの漁港・漁村が共存する神奈川県逗子市小坪エリアの山頂。網を繕う漁師や魚釣りをする少年が過ごす漁港エリアから、尾道のような坂の小路を駆け上がり、さらに石段を上った所まで寺や神社が点在する。例えば山頂のひとつの天照大神社には、こぢんまりとした境内に屋根に鰹木と千木が施された本殿と、4～5人が入ることのできる拝殿が中央に配置され、周囲を木々が囲んでいる。海からの風が爽やかに抜け、見晴らしが良いながらも落ち着きのあるこの空間をワーケーションのサイトとして利用できたらと想像してみた。そこには舟を想起させる家具のような東屋のような空間をつくって、木々によってやわらいだ潮風や木漏れ日などの自然を体いっぱいに感じながら仕事をする。一人でも、グループでも利用できる、身体的にちょうど良いスケールの舟が陸に漂っているかのように。もちろん呉越同舟のごとく、その場での巡りあわせで、新たな創作のワークセッションが行われるかもしれない。時には舟をめざして遊びに来る子供達に（ピーターパンにとってのフック舟長の舟は遊び場だ）、漂うワーカーの得意のプログラミングやデザインを通して、神社ではあるが寺子屋的に交流することができるかもしれない。そして座ってばかりのデスクワーカーが、この天界と地上を結ぶ170段の階段を駆け上がれば、立派なワークアウトにもなる。一方で東北の震災を経験した私たちは、残念ながら海の町に少し恐怖を抱くようになってしまった。山の上に安心できる舟があることは、町の人への日常における避難の想起にもなりえるのではないだろうか。サバイバルな観点からいえば、海からの道中には井戸も存在する。町の人たちが大切にしてきた神社、一宿一飯のごとく掃除や修繕をお手伝いすることが、大袈裟ではなく次の世代へ、未来へこの大切な場所を残す手助けの一翼を担うことになれば素敵な話である。あたりまえのように、夕陽が沈む相模湾を遠くに富士山を望みながら、幸せな一日は終わるのである。